

ライフステージでとらえる住生活の授業実践 (第3報) —ワークシートの分析—

白井由貴子*・岡田みゆき**・小川育子***

Lesson Plan Development for Housing Based on Students' Life Stages III — Analysis of Students' Activities on Worksheets —

Yukiko SHIRAI*, Miyuki OKADA**, and Ikuko OGAWA***

Abstract

In part 3 of the Lesson Plan Development for Housing Based on Students' Life Stages, the students' activities on worksheets used in the lesson plan of part 1 were analyzed. In the project work of apartment house choosing, the students could not use their knowledge thoroughly and they felt the difficulty of real decision-making with current economic realities and information of the housing market. Before and after the study, only 10.3% of the students choose the same apartment with the same reason. The housing lesson plan could much affect on their decision-making. The students' answers to the question on their life in the house they choose in each life stages demonstrated that they had considered their economic aspects, their family, their local community, and their long-term objectives.

* 現高松市立紫雲中学校 (2003年3月香川大学教育学研究科修了)

** 現北海道教育大学釧路校 (2004年3月まで香川大学教育学部家政教育講座)

*** 香川大学教育学部家政教育講座

1. 研究目的

この研究は、生徒が主体的・実践的に健康で安全な住生活を創造することを目的に行った授業の実践的研究^{1, 2)}の続報である。本報では、授業で使用したワークシートを分析した。ワークシートを分析することで、生徒が授業中にどのような活動を行ったかなど、生徒の学習過程の把握ができ、授業やカリキュラム改善へのフィードバックが可能となるためである。

分析は、特に、授業により、住生活について考える力はどの身についたか、および家族への配慮や経済的な視点、生涯発達に関わる視点など、生活を総合的にとらえる力はどの身についたかを中心に行った。また、この分析の結果、得られた特徴的な結果である著しい男女差についても取り上げ、今後の課題を考察した。

2. 研究方法

2.1 授業の概要

この授業は、生徒が興味・関心をもって取り組めること、家族や社会との関わりを重視すること、生活を総合的に捉えることを目的とした高等学校家庭科の授業である。

3つのライフステージ（「一人の生活」、 「家族との生活」、 「老後の生活」）を設定し、それぞれの段階で、住居を選択し、そこでの生活を総合的に捉えられるように、学習内容（室内外の環境、安全性、生活費と家賃、生活時間など）を広く捉えて、さらに意思決定場面を取り入れた授業構成をした。

2.2 ワークシート

授業で使用したワークシートは、ワーク

シートー1（WS1：「一人の生活」授業前）、ワークシートー2（WS2：「一人の生活」授業後）、ワークシートー3（WS3：「家族との生活」授業前）、ワークシートー4（WS4：「家族との生活」授業後）、ワークシートー5（WS5：「老後の生活」授業前）の5種である。詳細は、第1報に示した。授業時間中に生徒が記入したワークシートを回収、分析した。

2.3 分析資料

授業を実施したのは、香川県立T高等学校2年生4クラスを対象に、2002年1月から2月に実施した。授業を受けた生徒、全160名のうち、すべての授業に出席していた、つまり、WS1からWS5までのすべてのワークシートがそろっている107名（男子51名、女子56名）のみを分析の対象とした。

ワークシートは選択肢からの択一の課題と、自由記述の課題があるが、自由記述については、記述内容から視点を抽出して分析した。男女差については、カイ二乗検定を行った。

3. 結果および考察

3.1 住生活について考える力

表1には、「一人の生活」のアパート選びおよび「家族との生活」の住居選びで回答された自由記述の選択理由を、視点ごとに分けて回答者数および割合（%）で示している。

WS1の設問1は、授業前に、一人暮らしのためのアパート選びのポイントを尋ねたものである。この回答（WS1-1）は、生徒がこの授業以前から知っていた視点である。

WS1の設問2（WS1-2）は、同じく「一人の生活」についての学習前であるが、具体的な物件を選択したときの選択の理由を

たずねたものである。

WS2の設問2への回答（WS2-2）は、「一人の生活」についての学習後に、再度アパートを選択したときの選択理由である。

WS1-1の結果から、生徒は一人平均3.4の視点から記述しており、学習前に住居の選択に関する知識を比較的多く持っていたことがわかる。しかし、WS1-2での具体的な物件の選択に際しては、一人平均2.0個と、記述された視点数は急激に減少している。学習後に再度、選択したときの視点（WS2-2）は、2.1個で微増していた。

記述された内容として多くあげられるのは、学習前のWS1-1では「家賃他費用」「広さ」「新しい・きれい」「周辺利便性」「交通手段」、WS1-2では「設備」「家賃他費用」「間取り」「交通手段」「新しい・きれい」、学習後のWS2-2では「設備」「家賃他費用」「交通手段」「間取り」「収納」である。

「一人の生活」の学習によって、「収納」「交通手段」「家賃他費用」「周辺利便性」などが増え、「間取り」「広さ」「駐車場」「設備」「新・きれい」「通勤距離」などが減っているが、その差は大きくはない。

特に、「一人の生活」の学習では、室内外の安全や環境について中心として取り上げたにも関わらず、これに関する項目をあげた生徒は増えたとはいえない。しかし第2報²⁾で述べたとおり、確認テストの結果では、健康と安全についての視点も正確に答えられていた。知識としては得られているにもかかわらず、意志決定場面には生かされていないという結果となった。

この理由には、現実的な場面になると持っている知識をどう使うかについて慣れていないという生徒自身に起因するものと、生徒が

事前に知っていた視点に関する情報が、実際の不動産物件情報では完全に充足できていなかったこと、あるいは事前にあげた視点についての物件ごとの差があまりなかったことなど、提示された情報の内容に起因するものなどが考えられる。

まず、生徒の意志決定への慣れについてみると、同じ条件で2回目の意志決定になる、WS2ではわずかながら視点が増えている（2.0→2.1）が、事前の視点数3.4にははるかに及ばない。後述の表6で、「一人の生活の生活」学習後の感想に、「アパート選びの大変さ」をあげた生徒が多いことはこのことと深く関連し、持っている知識と意志決定がスムーズにつながらなかったことははっきりと認識されている。

次に、その原因とも考えられる提示した情報についてみると、この授業ではできるだけ実際の場面に近い状況設定をするために、実際の不動産情報をそのまま用いた（第1報の図2）。このため、住居の内外の「日当たり・風通し」「周辺安全性」「周辺自然環境」といった健康や安全に関する情報提供は十分とはいえない。このことがアパート選びの視点として上がってこなかった原因であろう。

現実のアパート選びに際しても、提供される情報は、現状ではこの授業で用いた情報と同じである。室内外の安全や環境については、実際に行ってみなければわからないことを学習する一方で、これらの視点は住居選びに必要な情報であることを認識したことによって、現実に提供されている情報に対して批判的な見方を身につけていくための素材として扱う必要もあると思われる。

表1には「家族との生活」での住居の選択（WS3-4）の結果も併せて示しているが、「設備」「交通手段」「家賃他費用」「通勤

表1 「一人の生活」「家族との生活」「老後の生活」における住居の選択理由

	WS1-1*			WS1-2**			WS2-2***			WS3-4***		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
家賃他費用	36	42	78	14	21	35	15	22	37	11	12	23
広さ	19	25	44	8	7	15	3	8	11	18	31	48
間取り	4	11	15	4	18	22	5	12	17	8	38	46
収納設備	1	3	4	0	7	7	3	13	16	2	17	19
駐車場	11	18	29	16	28	44	17	25	42	4	18	22
新しい・きれい	1	1	2	1	5	6	3	1	4	4	5	9
日当たり風通し	13	19	32	5	12	17	5	10	15	8	9	17
通勤距離	6	8	14	1	1	2	0	2	2	1	3	4
交通手段	7	13	20	9	7	16	10	4	14	1	0	1
所在地	12	19	31	8	13	21	9	15	24	2	3	5
周辺利便性	5	11	16	4	3	7	5	4	9	2	1	3
周辺安全性	13	19	32	10	5	15	4	12	16	5	5	10
周辺自然環境	4	10	14	1	0	1	0	2	2	0	2	2
その他	5	9	14	2	0	2	0	1	1	2	6	8
合計	8	11	19	3	5	8	10	5	15	22	22	44
1人平均	145	219	364	86	133	218	89	136	225	90	171	261
	2.8	3.9	3.4	1.7	2.4	2.0	1.7	2.4	2.1	1.6	3.1	2.4

* ワークシート-1 設問1に対する回答（学習前から知っていた内容）
 ** ワークシート-1 設問2に対する回答（「一人の生活」学習前アパート選択の理由）
 *** ワークシート-2 設問2に対する回答（「一人の生活」学習後アパート再選択の理由）
 **** ワークシート-3 設問4に対する回答（「家族との生活」学習前アパート選択の理由）

距離」「周辺利便性」は大きく減り、「4人暮らしにちょうどよい」「家族が集まりやすい」など「広さ」「間取り」の視点、「海が近い」「自然が多い」など「周辺自然環境」の視点をあげる生徒が多かった。「一人の生活」の住居と「家族との生活」の住居では異なった視点で選択されていることが明らかである。

次に、生徒個人個人の変化についてみる。表2には、「一人の生活」について、学習前に選択したアパート（WS1-2）と、学習後に再度選んだアパート（WS2-2）とが変化したかどうか、またその選択理由の視点が変わったかどうかを、回答者数と割合で示している。

「一人の生活」の学習の前後で、選択したアパートが変化した生徒が全体の43.0%、選択したアパートは同じでも、その約80%（57人中46人）が選択の理由は変化している。全く同じアパートを全く同じ理由で選択した生

徒は全体の10.3%にすぎない。

表2 「一人の生活」学習における「アパート選び」の選択アパートおよび選択理由の事前・事後変化（WS1-2とWS2-2の比較）

	事前・事後で選択したアパート		事前・事後のアパートの選択理由	
	人	%	人	%
男子 n=51	変化した	25 (49.0)	変化した	23 (45.1)
			変化なし	2 (3.9)
	変化なし	25 (49.0)	変化した	19 (37.3)
			変化なし	6 (11.8)
	NA	1 (2.0)		
女子 n=56	変化した	21 (37.5)	変化した	20 (35.7)
			変化なし	1 (1.8)
	変化なし	32 (57.1)	変化した	27 (48.2)
			変化なし	5 (8.9)
	NA	3 (5.4)		
全体 n=107	変化した	46 (43.0)	変化した	43 (40.2)
			変化なし	3 (2.8)
	変化なし	57 (53.3)	変化した	46 (43.0)
			変化なし	11 (10.3)
	NA	4 (3.7)		

このことは、学習によってほとんどの生徒の住居に対する視点が変化したことが推定される。表1では、学習の前後で生徒を全体としてみたときの各視点の差は少なかった。しかし表2の結果から、約90%の生徒が異なる視点を身につけ、実際の意志決定場面でも利用できたと考えられる。

3.2 生活を総合的にとらえる力

それぞれのライフステージで、各自が選んだ住居でどんな生活をしているかについての質問に対する回答（自由記述）を表3～表5に示した。表3は、「一人の生活」（WS1-3）、表4は「家族との生活」（WS3-5）、表5は「老後の生活」（WS5-2）で、それぞれどんな生活をしているかについて、内容別に、記述していた生徒の数およびその割合（%）を示している。

表3 「一人の生活」における自分の生活 (WS2-3)

	男子 n=51		女子 n=56		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
仕事						
一生懸命・まじめ	23	45.1	27	48.2	50	46.7
適当に	4	7.8	3	5.4	7	6.5
その他	5	9.8	3	5.4	8	7.5
NA	9	37.3	23	41.1	42	39.3
余暇の過ごし方						
遊ぶ	10	19.6	* 22	39.3	32	29.9
休養		15.7	11	19.6	19	17.8
趣味	2	3.9	* 8	14.3	10	9.3
買い物	0	0.0	* 6	10.7	6	5.6
その他	15	29.4	10	17.9	25	23.4
NA	8	35.3	17	30.4	35	32.7
お金や時間の使い方						
お金節約	20	39.2	24	42.9	44	41.1
貯金	5	9.8	11	19.6	16	15.0
時間の有効利用	11	21.6	8	14.3	19	17.8
その他	10	19.6	9	16.1	19	17.8
NA	17	33.3	19	33.9	36	33.6

* p<0.05で男女間に有意差

表4 「家族との生活」における自分と家族の生活 (WS3-5)

	男子 n=51		女子 n=56		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
夫の生活						
家族との関わり	9	17.6	** 33	58.9	42	39.3
仕事	33	64.7	* 29	51.8	62	57.9
家事	5	9.8	9	16.1	14	13.1
趣味	3	5.9	2	3.6	5	4.7
その他	11	21.6	12	21.4	23	21.5
NA	4	7.8	4	7.1	8	7.5
妻の生活						
家族との関わり	8	15.7	* 17	30.4	25	23.4
仕事	18	35.3	23	41.1	41	38.3
家事	23	45.1	26	46.4	49	45.8
趣味	4	7.8	8	14.3	12	11.2
その他	9	17.6	10	17.9	19	17.8
NA	5	9.8	5	8.9	10	9.3
長男の生活						
家族との関わり	3	5.9	* 10	17.9	13	12.1
遊び	7	13.7	6	10.7	13	12.1
スポーツ・趣味・習い事	13	25.5	* 33	58.9	46	43.0
健康・活発・のびのび	7	13.7	20	35.7	27	25.2
その他	11	21.6	0	0.0	11	10.3
NA	4	7.8	6	10.7	10	9.3
長女の生活						
家族との関わり	2	3.9	** 15	26.8	17	15.9
遊び	7	13.7	* 7	12.5	14	13.1
スポーツ・趣味・習い事	6	11.8	13	23.2	19	17.8
健康・活発・のびのび	11	21.6	24	42.9	35	32.7
その他	5	9.8	** 11	19.6	16	15.0
NA	0	0.0	6	10.7	6	5.6

* p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.005で男子・女子間に有意差

表5 「老後の生活」の生活 (WS5-2) についての回答

	男子 n=51		女子 n=56		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
趣味	24	47.1	35	62.5	59	55.1
家族との関わり	3	5.9	24	42.9	27	25.2
経済	7	13.7	7	12.5	14	13.1
健康	2	3.9	7	12.5	9	8.4
地域との関わり	0	0.0	8	14.3	8	7.5
NA	2	3.9	5	8.9	7	6.5

表3（「一人の生活」）では、余暇については「遊び」「休養」「趣味」「買い物」など具体的に上がっているが、仕事は「一生懸命・まじめに」、「お金は節約」、「時間は有効利用」と漠然とした回答が多い。

表4（「家族との生活」）では、夫には、「仕事」「家族との関わり」、妻には「家事」「仕事」「家族との関わり」、長男には「スポーツをしている」「健康・のびのび」、

長女には「健康・のびのび」という記述が多かった。

表5（「老後の生活」）では、「趣味」および「家族との関わり」が多かった。「地域との関わり」を持った生徒も女子に8名（7.5%）いた。表3に比べると、表4、表5の方が具体的な記述が増えていた。

また、表3～表5について、なにも記述しなかった生徒（NA）の割合をみると、表3（「一人の生活」）では、仕事について39.3%、余暇の過ごし方について32.7%、お金や時間の使い方33.6%と約3分の1の生徒が記述していなかった。しかし表4（「家族との生活」）では、もっとも記述していない生徒が多い長女についてでも、5.6%と大きく減少している。表5（「老後の生活」）でも、6.5%と少ない。

現実の自分から最も近い未来に起きる「一人の生活」についてよりも、はるかに時間を経過し、現在の自分よりも乖離が大きい「家族との生活」や「老後の生活」について記述できた生徒が多く、記述された内容も具体化したという結果になっている。このことは、学習によって、自分の生活を創造しようとする力、また、創造した生活を自分の言葉で表現する力が得られた結果ではないかと考えられる。

次に、「一人の生活」「家族との生活」の学習後の感想（WS2-3およびWS4）について内容別に集計した結果を、表6に示した。（「老後の生活」学習後の感想は、すべての学習後の感想として第1報で述べたので、ここでは取り上げない。）

「一人の生活」についての学習後には、「住居費も高い」「生活費が思った以上にかかるので驚いた」など、経済的な視点に気付いたと記述した生徒が最も多く、さらに経済

表6 「一人の生活」(WS2-3)「家族との生活」(WS4)における学習後の感想

	男子 n=5		女子 n=56		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
「一人の生活」学習後						
知識が習得できた	7	13.7	0	0.0	7	6.5
住居選びの大変さを実感	11	21.6	22	39.3	33	30.8
経済的視点の重要性を実感	22	43.1	37	66.1	59	55.1
生活全体考慮の必要性を実感	22	43.1	30	53.6	52	48.6
地域・環境考慮の重要性	2	3.9	9	16.1	11	10.3
記入なし	8	15.7	4	7.1	12	11.2
「家族との生活」学習後						
知識が習得できた	2	3.9	1	1.8	3	2.8
経済的視点の重要性を実感	10	19.6	11	19.6	21	19.6
家族への配慮の必要性	25	49.0	50	89.3	75	70.1
老後の生活を考慮	5	9.8	11	19.6	16	15.0
現在の家族への配慮	0	0.0	2	3.6	2	1.9
記入なし	5	9.8	2	3.6	7	6.5

だけでなく、「家賃だけでなくいろいろな面に気をつけることが大切」など「生活全体を考えて住居を選ぶ」ということに気づいた生徒、この結果、「家選びがどれくらい大変かわかった」「何気なく広告を見ていたが、選ぶのは難しい」など「住居選びの大変さ」に気づいた生徒、「『暮らす』ことは難しいと思った」というように、住生活のみにとどまらず、生活全体に視野が広がったことがわかる。さらに、「防犯面からも近所づきあいは大切」「周辺の昼夜の変化や逃げ場所の確保なども重要」など、住居としての環境から地域への視点へつながった生徒もいる。

これに対し、「知識が習得できた」をあげた生徒はごくわずかしかなかった。第2報で指摘したとおり、知識の定着はひじょうに

よかったにもかかわらず、生徒の感想は、住生活にとどまらない生活の種々の視点への気付きに集中していた。

表6の「家族との生活」学習後でも、同様に、知識を習得したという生徒は少なかった。ここでは、「家族への配慮」への気付きが格段に多く指摘されている。しかしこれにとどまらず、老後の生活への配慮の必要性を指摘したり（16名、15.0%）や、現在の自分の家族への考慮したり（2名、1.9%）と、さらに視点が広がった生徒もいた。自分の将来の生活について考える力が、より大きな視野への広がり結びついたと考えられる。

これらの結果から、住生活の学習から、広く生活を総合的にとらえる力や、自分自身の生活について創造的に考える力を生徒は身につけたと考えられる。

3.3 男女差

これまでに示した表3～表6には、男子・女子間で有意差があった場合に、「*」「**」「***」で示している。たとえば、表3の「一人の生活」の「余暇の過ごし方」では、「遊ぶ」「趣味」「買い物」ともに、女子は男子より有意に多く回答されていた。表4の「家族との生活」では、「家族との関わり」を記述した女子は男子より有意に多かった。「老後の生活」でも「家族の視点」は女子に有意に多かった。

これ以外にも性差による有意差がいくつか見られているが、もっとも大きな差が見られた2点について考察しておきたい。

表7には、「一人の生活」の予算についての回答（WS2-1）を分析した結果を示した。予算では男子は女子よりもバランスを欠く予算をたてているものが有意に多い。また、家賃の支払いについて、きちんと理解されて

いない割合が、女子は男子より有意に多かった。

表7 「一人の生活」における生活費の予算計画（WS2-1）

	男子 n=5		女子 n=5		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
予算（合計） ^a						
OK	35	68.6	43	76.8	78	72.9
×	16	31.4	13	23.2	29	27.1
予算（バランス） ^b						
OK	10	19.6	37	66.1	47	43.9
△	36	70.6	16	28.6	52	48.6
NA	5	9.8	3	5.4	8	7.5
家賃の計算 ^c						
OK	14	27.5	12	21.4	26	24.3
△	32	62.7	14	25.0	46	43.0
×	3	5.9	27	48.2	30	28.0
NA	2	3.9	3	5.4	5	4.7

- a 各支出項目の合計が収入に一致しているか
 (OK:合計=収入, ×:合計≠収入)
- b 交際費や遊興費が食費など必要経費と比べ、割合よく配分されているか
 (OK:必要経費>交際費他, △:必要経費<交際費他)
- c 家賃が会社からの補助を差し引いてきちんと計算できているか
 (OK:一致, △:±数千円の誤差, ×:大きなずれ)
- *** p<0.005で男子・女子間に有意差

表8には「家族との生活」での家族の生活についての結果（WS3-1）を示している。女性である「妻」の職業に対し、男子は52.9%が「家事専業」、15.7%が「フルタイムワーカー」を、女子は「フルタイムワーカー」42.9%、「家事専業」17.9%と設定しており、著しい男女差があった。

表8 「家族との生活」における夫と妻の職業（WS3-2）

	男子 n=51		女子 n=56		全体 n=107	
	人	%	人	%	人	%
夫の職業						
フルタイム	46	90.2	55	98.2	101	94.4
パートタイム	0	0.0	0	0.0	0	0.0
家事専業	0	0.0	1	1.8	1	0.9
その他	5	9.8	0	0.0	5	4.7
妻の職業						
フルタイム	8	15.7	24	42.9	32	29.9
パートタイム	13	25.5	20	35.7	33	30.8
家事専業	27	52.9	10	17.9	37	34.6
その他	3	5.9	2	3.6	5	4.7

*** p<0.005で男子・女子間に有意差

今回は住生活に関する学習として授業設計を行ったため、時間の制約もあり、これらの結果について生徒へのフィードバックができなかった。しかし、たとえば「家庭基礎」では、予算については「消費生活と環境」の家庭の経済、また、夫と妻の職業については「人の一生と家族・福祉」と深く関わりを持つ内容である。

「家族との生活」や「老後の生活」でも、ローンや社会保障を含めて予算を考えたりすることも可能であり、福祉がより身近な内容になると考えられる。また、妻の職業に対する男女の大きな考え方の隔たりは、具体的に自分達自身の考えの中にある男女差について考える材料となり、自ら考えられるよい機会となり得るのではないだろうか。

4. 結論

本論文では、生徒が主体的に、健康で安全な住生活を創造する能力と実践的な態度を育成するために、ライフステージに基づいて構成された授業の中で、生徒がどのように学習活動に取り組んだかについて、授業で用いたワークシートの分析から考察した。

この結果は以下の通りである。

- (1) ライフステージによって住居選択のための異なる視点を身につけることができた。
- (2) 住生活だけでなく、自分や家族がどんな生活をしているかについて、広い視野から考え、表現することができていた。

このように、本授業は住生活について考える力、生活を総合的にとらえる力の育成に寄与することができた。これは、ライフステージごとの住生活について、将来すぐに起こりうる身近な状況設定から学習を始めたこと、

生徒自身による意志決定の場面を設定したためであると考えられる。健康で安全な住生活を生徒が主体的に捉えることができ、また、実践的な態度も身につけたことが伺えた。しかし、いくつか今後に残った課題がある。

まず、身近な状況設定については、今回、研究を行ったのは地方の、進学希望者が大半を占める高校であり、大学入学とともに一人の生活を始めるという状況が、ほとんどの生徒に自分の将来のこととして想定されるものであった。しかし、全国的に見れば、子どもの親からの独立時期は異なることも指摘されている³⁾。地域や高校によってどのような状況設定が望ましいかについての検討は必要であろう。

次に、意志決定と情報提供については、住居選択など、意志決定をさせる場面で、どのような状況設定が有効か、提示する情報はどうかあるべきか、あるいは実際の生活で情報をどう活用すべきか、情報の使い方をどう指導していくかなど、学習段階に応じた意志決定と情報のあり方については、授業の構成にひじょうに重要な鍵となると考えられる。木村⁴⁾は、特に現代では、意思決定に際しどんな枠組みの中で意思決定するかその枠組みを意識することが必要になってきていると指摘しているが、この点も含めて、教材としての意思決定のための情報についての詳細は今後の検討課題である。

最後に、カリキュラムや授業へのさらなる発展の可能性についてである。新学習指導要領「家庭基礎」では、住生活については、「家族の生活と健康」で取り扱われるが、たとえば、男女差について得られた結果を、「人の一生と家族・福祉」や「消費生活と環境」など、他領域の教材として取り扱うことが可能である。また、さらに、本研究で行っ

ライフステージでとらえる住生活の授業実践（第3報）

たようなライフステージごとに生活をとらえる方法によって、「人の一生と家族・福祉」「消費生活と環境」さらに、「家族の生活と健康」すべてを取り入れた総合的なカリキュラムを考えることも可能であると考えられる。生徒が生活を総合的に考えたり、自分で自分の生活を創造する力の育成のための1つの方法として、検討の価値があると考えられる。引き続きこれらの点について、検討していきたい。

引用文献

- 1) 岡田みゆき, 白井由貴子, 小川育子「住生活をライフステージからとらえた授業開発(第1報)」日本家政学会誌, 55, 41-49, 2004.
 - 2) 白井由貴子, 岡田みゆき, 小川育子「住生活をライフステージからとらえた授業開発(第2報)」日本家政学会誌, 55, 51-58, 2004.
 - 3) 北村安樹子「成人未婚者の離家と親子関係(2)」LDIレポート, 2002(7), p. 4-28, 2002.
 - 4) 木村競「終わりなき再編成としての意思決定」茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術), 46, 249-268, 1997.
- 1) 岡田みゆき, 白井由貴子, 小川育子「住